

自浄作用が働かない歌壇

——金井美恵子の短歌批判に歌人はどう応えたか——

内野光子

奇妙な出会いであった。あのことがなければ、おそらく、私は金井美恵子を知らずに済んだのかも知れない。著者本人からお送りいただいた近著『目白雑録5』から「カストロの尻」までの数冊を手探りで読みはじめたのであった。「小説」らしくない小説、着地が見えにくい評論・エッセイのいずれも、冒頭に抱く不安に引きずられるように、その不安を解消したい一心で、読み進めた。しかし、評論・エッセイは、その文体に馴れてくると、細部にわたる考察と、なんとも鋭い批判が心地よくくらくらに響いてくるのだった。「群れを嫌い、権威を嫌い、束縛を嫌い……」となると、まるで、ドラマ「ドクターX」のナレーションになってしまふのだが、その徹底した反権威のスタンスには、確固たるものがある。

二〇一二年秋に、金井美恵子「たとへば（君）、あるいは、告白、だから、というか、なので、『風流夢譚』で短歌を解毒する」（KAWADE道の手帖 深沢七郎）二〇一二年五月、「金井美恵

子エッセイ・コレクション「1964・2013」3「平凡社、二〇一三年一〇月、に加筆再録）を知ったが、読んではいなかった。その年の暮れから翌年にかけて、この評論をめぐって、歌壇は少し騒がしくなり、私も、ようやく、上記「解毒する」を入手、出版まもない拙著「天皇の短歌は何を語るのか」（お茶の水書房 二〇一三年八月）を読んでもらいたく、献呈したのであった。

まず、件の評論の長い表題は、歌壇にいささか関心のある人ならば、「たとへば（君）」が、河野裕子・永田和宏という歌人夫妻が、妻の没後刊行された『たとへば君 四十年の恋歌』（文芸春秋、二〇一一年七月）と河野の一首「たとへば君 ガサツと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか」に、「告白」は、岡井隆の自伝『わが告白 コンフェッション』（新潮社 二〇一一年二月）に由来するものであることがわかる。「風流夢譚」は短歌について書かれた小説である。では、短歌とは……」で始まる、金井の評論は、まず、近年臆面もなく大皇

賛美を繰り返し、歌会始選者から御用掛となった岡井とともに、おなじく、夫妻で歌会始選者を務め、在任中に病死した河野（一九四六～二〇一〇）への挽歌が新聞歌壇に溢れた現象を斬る。河野ブームともいわれ、美智子皇后の「もはや（社会）現象ですわ」との言に高揚している永田らを、「超大衆的な定型詩歌系巨大言語空間」（傍点金井）、「短歌という巨大な共同体的言語空間」をなす歌壇のなかに位置づける。その上、「風流夢譚」を「和歌という、『歌会始』がどうやらその頂点を占めているらしい、たとえば日本一の富士の山を思い出させる言語空間の言葉が、あれこれ飾りたてられてはいるものの、『意味』としては空疎で、じゃあ自分も、と（簡単に作れそうなので）歌を詠もうとする者は盗作者（深く記憶に染みこまれてしまっているあれやこれやの歌のせいで）になる、という小説」として、読み返し、紹介するなかで、現代短歌、歌人を痛烈に批判するものであった。

従来から、現代短歌は、天皇制から自立しないかぎり、文芸の「ジャンル」としては、成り立たないのではないかと、問題提起をし続けてきた私としては、大いに共感したのであった。

歌壇で口火を切ったのは、永田・河野が率いていた「塔」の松村正直であった。松村のブログ①「やさしい敵日記——松村正直の短歌と生活」（二〇一二年八月二十四日）によれば、歌人の多くが、この金井の論考を読んでいるのだろうか疑問を呈して、②「歌壇時評・短歌への嫌悪感」（短歌）二〇一二年九月）を発表したという。ここで、松村は、一短歌を作るものは、短歌の世界だけにとどまっていけない。短歌の魅力や仕組みを多く

の人に広めていく必要がある」「金井の論考は、何よりもそのことに気づかせてくれたのだと思う」と結ぶ。これを、まるで「模範解答」のようだとする沢口美美は、③「厳しい自己批評の目を」（歌壇）二〇一三年一月）において、「歌壇内だけの視野狭窄に私達は陥っているのではないかと」自省し、金井の論考に触発されて思うのは「歌全体に亘るきびしい自己批評の目を持たなければならぬのではないかと」も提言する。しかし沢口も、金井が具体的に指摘する「天皇を頂点とする共同体」とする「歌壇」については応えてはいないことになる。歌壇としては、できれば無視して通り過ぎたい一件ではあったが、様子見の状況は、『短歌研究2013年短歌年鑑』の④佐佐木幸綱・島田修三・栗木京子・小島ゆかり・穂村弘による座談会での発言や『角川短歌年鑑』平成25年版での評論からも窺える。

そこに登場する歌人の発言や文章を見ると、金井への真っ向からの反論は少ないのだ。⑤三枝昂之「業界内の必然、外から見える不自然」（角川短歌年鑑『平成25年版』）において、三枝は、金井の批判は、旧来からの短歌批判の範囲内にある、金井論文それ自体へ私が反応したいことは特になし」とし、「河野の作品がアピール力を持っていたからこそ生まれた彼女と家族の生き方への関心であって、作品自体の魅力はどんな批判や嫌悪の前でもいささかも損なわれない」「ジャンルそのものがまるごと嫌悪の対象となる傾向」が「短歌という詩型の際立った特徴」であるともいい、現在、今野寿美と夫妻で歌会始選者を引き受けているだけあって、金井の反撃をそらす。

⑥川野里子「世界への断念、突出するトリビア」（角川短歌

年鑑「平成25年版」において、川野は、金井が「歴史的、空間的な巨大な言語の共同体としての短歌」を語り、その共同体へのあらわな「嫌悪感の熟さ」に対して、「不思議な平静と均衡を保っている短歌空間の静けさが気になる」とも指摘するが、みずからの主張は見えにくい。

「特別論考 金井美恵子の歌壇批判に込める」と冠せられる⑨「島田修三」もの哀しさについて（『角川短歌年鑑』平成25年版）では、「昨今の現代歌壇に対する洞察としては、かなり正確に中心を射ぬいている」としながら、「金井には短歌を同時代に文学として理解しようとする意思はほとんどなく、とりつく島の無い高飛車な狭量に腹立たしさを覚えたりもしたのだ」と冒頭に述べる。金井の文章を、そして「風流夢譚」自体も読み込んだ上で、深沢七郎の短歌観にも言及するが、明確な「応え」にはなっていない。

しかし、岡井の率いる『未来』の大辻隆弘は、⑤「短歌月評・短歌否定論」（『毎日新聞』二〇二二年二月十九日）において、かなり強い調子で「金井の文章に底流するのは、文壇のなかに今も根強く残る短歌への蔑視である。それは、現代短歌を『和歌』とみなし、それを天皇制と直結させる偏狭で硬直した戦後左翼的な短歌観に他ならない」と反論するのだが、金井の書く小説やエッセイを少しでも読めば、この反論こそ、局所的な一面しかみていないことになりはしまいか。また、『塔』の中堅である梶原さゆ子は⑥「短歌時評・私性と共同体と批評について」（『塔』二〇二三年三月）において、「短歌における日本語の微細なゆらぎには、そのような日本語を知る者たちの空間、

つきり可視化されたところがあった、金井さんはそこを意識したんだらうと思います」といった発言に救われたと記すが、座談会の発言とは言えやや明瞭さを欠いてはいないか。

山田清児は、『詩客』の短歌時評⑩「たとへば（君）、あるいは、告白、だから、というか、なので、『風流夢譚』で短歌を解毒する」を解毒する（二〇二三年一月十八日）において、金井の文章に丁寧に分け入りながら、「タイトルにある『風流夢譚』で短歌を解毒する」の意味するところを読む。「解毒」という言葉の本来の語意からすれば、短歌が毒なのではなく、何らかの毒に冒されている短歌を『風流夢譚』の効力によって毒から解放するという意味に取るのがより自然である」という結論にいたったという。

最近『岡井隆考』（北冬舎 二〇一七年八月）を出版した「未来」の江田浩司はブログ『万来舎』の⑪「連載再開にあたり、金井美恵子の現代短歌批判から思ったことなど」（二〇二三年三月二二日）において「短歌が文学表現であるのならば、『共同体的言語空間』の恩恵を踏み越えたところに、そのテキスト自体の本質的な価値が存在し得るはずである。もし、そのような価値を見いだし得ないならば、短歌は文学とはおよそ無縁な言語表現であるということだ」「短歌の批評の真理は、『共同体的言語空間』の恩恵とは次元の異なる批評の場で生まれる。テキストと批評者の孤独な対話には、本来『共同体的言語空間』の恩恵が入る余地はない」と正論を述べる一方で、島田の⑫「もの哀しさについて」について「島田の歌人としての誠実な姿勢に感心した。歌壇や、結社の中心に位置する島田が、リスクを

いわば、大きい共同体の中でしか味わいにくいものがあるのも事実だ。広げるとしたら、共同体自体を広げていく」との言も「未来志向」の「模範解答」の域を出ず、現代の閉鎖的な歌壇の実態への批判は感じられない。金井の批判の対象となった歌人が率いる結社『未来』、『塔』のひざ元から、反論やどこか暖味な声が上がったこと自体、いまの歌壇における象徴的な現象と言えるのかもしれない。阿木津英は、⑬「図書新聞」（二〇二三年三月一六日）の時評において、金井の論考では、超大衆的短歌が和歌的権威空間と化していることが指摘されたとし、「人間の集まる場所、どこにでも権威空間はあるものだ。しかし、詩とも俳句とも小説とも違った難問を、短歌という形式は抱え込んでいること」から目を背けることはできない、と結ぶ。金井の具体的な指摘に込めて欲しいところでもある。

以下は、ネット上での文献をふくめてなのだが、風間祥は、そのブログ『銀河最終便』において⑭「大辻隆弘さんの毎日新聞「短歌月評・短歌否定論」を読んで」（二〇二二年二月八日）、⑮「2再び、金井美恵子さんの文章と歌人の反応の不思議さ」（二〇二二年二月九日）、⑯「今さらもう何を言っても詮ない」とすべてを諦めてよく折節」（二〇二三年一月二日）と一貫して全面的に金井に共感し、歌壇の反応に批判的である。ただ、風間は⑥「座談会・東日本大震災から一年を振り返って」における穂村弘の「その共同体と表現との微妙な関係のすべてが気持ち悪いと言えは気持ち悪いわけです。また、これまでは結社と皇室のパラレルな感じとか相似形として漠然と感じられていたところが、たとえば永田家は歌の家という形で、今回は

も承知の上で書いた文章を真摯に読まずして、短歌の将来を語ることに私は疑問を持つものである。（中略）金井や、島田の文章に真摯に向き合い、現代短歌の問題点を共有するところから、今後の短歌への希望が生まれてくるのではないだろうか」と、配慮に満ちた結論に導く。

また、嵯峨直樹は、⑯「コミュニティから見る短歌史の生まれる場所」（『美志』（後刊号）二〇二四年三月）において、「『皇室御用掛』の『大歌人』が君臨しているというのが金井の見立だがこれは半分当たると言わざるを得ないだろう」「深沢七郎が風流夢譚で御用掛歌人を茶化したのも、そこに非常に重い意味を見出したからに他ならない。要するに、当の歌人が歌会始に重要性を見出しなくても、外からはそう見えており、そう思われても致し方ないのである」ともいう。「重要性を見出しなくても」というのが、江田が、島田の言を「リスクを承知の上で」とまで表すように、「歌会始」をめぐる事情には「ひそかに」「重要性」を見出ししている多くの「有力歌人」たちの現実を目に向けて欲しいと思った。

以上が、私の接し得た「歌壇」の反響であるが、数年経た現在、金井の提起したこの問題を話題にする歌人もいなくなった。ただ、「解毒する」発表後の、こころした当時の反響について、金井自身は、デビュー作「愛の生活」以来の経験で「感激」した、とのことであった（『歌の人々、あるいは、『風流夢譚』事件とその周辺』前掲『金井美恵子エッセイ・コレクション』1964-2013）3頁。

たしかに、歌壇というのは、ほかのジャンルからの関心には

敏感で、その最たるものが「第二芸術論」議論であったろうか。近年では、東日本大震災での詩人や俳人のいち早い反応が気になるらしかった。一昨年は、「ユリイカ」で短歌特集がなされたり、昨年は、本誌「早稲田文学」増刊「女性号」で、女性歌人が登場したりしたこと自体が、ひとしきり話題になったのが、その例といえるだろう。一方、歌壇内から著名歌人や歌壇に不都合な事実の提示や異議申し立てがあっても、無視し続けるという土壌さえある。いわば自浄作用が機能しない世界といえよう。金井のいう「解毒」には、そんな意味が込められていたように思う。

今回の依頼を受けて、過去の金井作品を読んで見ようと、近くの市立図書館で所蔵を調べてみた。その充実ぶりに知らない世界を知って、一冊一冊の背後にいろいろ愛読者の教を思った。借りて来たエッセイ集の「あとがき」で「この半世紀を、自分の書いた文章によって読みかえしてみると、我ながら驚いてしまうのは、変わらず同じことを書いている」という作家みずからのストレートな言葉に出会って、私はいささか安

堵したのである(金井恵美子エッセイ・コレクション「1964-2013」4「平凡社、二〇一四年三月)。私も前述の近著の「あとがき」につきのように記していた。

「あらためて、拙稿を読み返して、なんと同じことを言い続けてきたことか、忸怩たる思いです。同じことながらそれを証する事実が次から次へと現れることにも心が突き動かされるのです」

(「天皇の短歌は何を語るのか」御茶の水書房、二〇一三年八月)

また、旧拙著『現代短歌と大皇制』(風媒社、二〇〇一年二月)の「あとがき」においても、同趣旨のことを書いていたことを、あらためて、思い出したのであった。

金井からは「上品なあげすけ」とも評された私の言だが(『日経録5』朝日新聞出版、二〇一三年九月、一四四頁)、「上品」は保証の限りではないが、ファクトにもとづく「あげすけ」な発言をいまま少し続けたいと思っている。

〈歌人などによる「解毒する」関係文献リスト〉

- ①松村正直「角川『短歌』9月号」『やさしい鮫——日記松村正直の短歌と生活』二〇一二年八月二十四日*
- ②松村正直「歌壇時評・短歌への嫌悪感」『短歌』二〇一二年九月
- ③松村正直「金井美恵子と短歌」『やさしい鮫日記——松村正直の短歌と生活』二〇一二年九月三日*
- ④松村正直「続・金井美恵子と短歌」『やさしい鮫日記——松村正直の短歌と生活』二〇一二年九月十六日*
- ⑤大辻隆弘「短歌月評・短歌否定論」『毎日新聞』二〇一二年一月一九日
- ⑥佐佐木幸綱・島田修三・栗木京子・小島ゆかり・穂村弘「座談会・東日本大震災から一年を振り返って」『短歌研究2013年短歌年鑑』二〇一二年一月二日(金井美恵子の現代短歌批判)が議題になっている)
- ⑦三枝昂之「業界内の必然、外から見える不自然」『角川短歌年鑑』平成25年版、二〇一二年一月七日
- ⑧川野里子「世界への断念、突出するトリビア」同上
- ⑨島田修三「もの哀しさについて」同上
- ⑩風間祥「1大辻隆弘さんの毎日新聞「短歌月評・短歌否定論」を読んで」『銀河最終便』二〇一二年二月八日*
- ⑪風間祥「2再び、金井美恵子さんの文章と歌人の反応の不思議さ」『銀河最終便』二〇一二年二月九日*
- ⑫松村正直「続・金井美恵子論に対する反応」『やさしい鮫日

記——松村正直の短歌と生活』二〇一二年二月十五日*

⑬沢口美美「激しい自己批評の目を」『歌壇』二〇一三年一月

⑭風間祥「今さらもう何を言っても詮ないとすべてを諦めてゆくと折節」『銀河最終便』二〇一三年一月一日*

⑮山田清児「たとへば(君)、あるいは、告白、だから、というか、なので、『風流夢譚』で短歌を解毒する」『詩客』二〇一三年一月八日*

⑯梶原さい子「短歌時評・私性と共同体と批評について」『塔』二〇一三年三月

⑰阿木津英「超大衆的短歌の和歌的権威空間化——金井美恵子が『風流夢譚』で短歌を解毒したもの」『図書新聞』二〇一三年二月十六日

⑱島田修三「短歌の学校①和歌と短歌——やっぱり短歌は『うた新聞』二〇一三年四月

⑲江田浩司「連載再開にあたり、金井美恵子の現代短歌批判から思ったことなど」『万米舎——短歌の庫・江田浩司評論』二〇一三年三月二日*

⑳松村由利子「短歌時評」『かりん』二〇一三年二月

㉑峠厳直樹「コミュニティから見る短歌史の生まれる場所」『美志』(復刊5号)二〇一四年三月*

*二〇一七年二月現在のインターネット上での閲覧を示す。